

君の容貌

かんばせ

第一回

晩

ばん

蔵仁

くらひと

見始めて、すぐに夢だと分かった。

それが、子供の頃、見ていた景色だったからだ。

見慣れた景色ではあるが、もう随分長い間、足を向けていない場所。赤茶けた大地。

強く吸い込めば、肺が痛くなるほど乾いた空気。

真っ青な空から逃れようとでもするかのように地平線に沈みゆく赤い太陽。

こんな場所は他にはない。

しかも、この景色は、そそり立つ崖に立つあの場所からのものに違いない。

遠い昔に見慣れた光景だ。

これは夢だ。

どうせ夢なら覚めるまで楽しんでやるさ。

そう思った時……

突然、視界が空を見上げた。

紺碧の中に、見る者を圧倒するように巨大な月が三つ浮かんでいる。

天空に浮かぶ巨大な球体、ペ・ディオ、パ・ディオ、ノ・ディオを、

その順に、視線はゆつくりと眺めていく。

夢だけに、自分の思い通りに体は動かない。

まるでスクリーンを見ているように、目に入る景色を見るだけだ。

やがて、視点は一番小さなノ・ディオで止まり、しばらく月を注視したあと、突然、後ろを振り向いた。

一瞬、金色の何かが視界に入り、次いですべてが暗転する。

自分の叫び声で、リュウ・バセラは目を開いた。

最初に目に飛び込んできたのは、ベッドの上に表示された宇宙船の航行ホロ情報だ。

それで、彼は、自分が愛機の寝室にすることを思い出した。

リュウは、荒々しくシートをはねのけると上半身を起こした。

全身に汗をかいてる。

「どうしたの？リュウ」

声がした。女の声だ。

ベッドサイドの机に置かれたブレスレットから発せられた声だ。

もちろん、ブレスレットが意思をもって話かけたのではない。
ブレスレットを通じて、この船の生体コンピュータ、ミーナクシが
声をかけたのだ。

うんざりした口調でバセラが答える。

「どうもしいさ」

ベッドから滑るように降りると、メサド麻のシャツを脱ぎながら洗
面所に向かう。

浅黒い肌には無数の傷跡が浮かんでいるが、贅肉のない痩せた体は、
いたずらに力を誇示する無駄な筋肉を載せておらず、鞭のようなしな
やかさを秘めてなめらかに動く。

顔を洗って、鏡に映る自分の顔を見る。

変わり映えのしない顔だ。

切れ上がったアーモンドのような目。

ダーク・ブラウンの瞳。

細く釣り気味の眉。尖った鼻と顎の線。

自嘲するかのように、軽く両端が引き上げられた口元。

その瞬間、彼の脳裏に、金色の髪と瑠璃色のアイシャドウがフラッ
シュバックする。

あれは――

リュウの視線は、一瞬だけその焦点をぼかしたが、すぐにその視点
は定まり、素早く踵きびすを返すと、寝室を横切つて操縦室（コントロー
ル・ルーム）に向かった。

途中、テーブルの上に置かれたブレスレットを取る。

「ミーナ。状況報告だ」

操縦席コンソールに座りながら、ブレスレットに話しかける。

「さすがに、まだUGP統一銀河警察の警戒態勢は解けてないわ」

「今、俺たちのいるギラル小惑星帯はどうだ」

「誰も来ないわよ。普通の神経なら、巨大ブラック・ホールのすぐ側
の、ちっぽけな石の塊に近づこうとはしないもの」

「しかし長いな。ここに潜んで七十二時間だ。そろそろ警戒が緩んでも
いいと思うが」

「ダメ。この近くにはいないだけよ。今もグラスノ銀河中に警戒が張られているみたいね」

「あいつも根に持つな」

「あなたが、トアル太陽系長官の結婚指輪を盗むからでしょう。アルバ族のトーキナイト鉱星探掘権利書を破り捨てるだけで良かったのに」

「俺は、金目のものを盗みに長官の家に入っただけさ。ついでに、前から金の亡者だったあいつが気に入らなかったから、たまたま目についたあの書類を焼いてやったんだ」

「金庫の中に、たまたまあった書類をね。でもそれでアルバ族の子供たちは助かったわ」

大盗賊として銀河に名をはせるリュウ・バセラは、小さくため息をついた。

少し前に、盗賊船のコンピュータとしては話し方が丁寧過ぎるため、もう少し砕けた話し方をするように調整しようとしたのだが、やはりバイオ・ニューロン・サーキットが手に負えず、一度は諦めたのだ。しかし、後に思いついて、UGNL（統一銀河ネットワーク・ライブラリ）にアクセスして「砕けた女性の話し方」を学べ、と命令したところ——効果がありすぎたのだった。

スラング 俗語から、下品な言葉まで網羅して行われるミーナとの会話は、知らないものが声だけ聴いたなら、泥棒夫婦の会話にほかならないだろう。

「——ミーナ、これを見る」

「指輪？長官の指輪ね」

「スキヤンしてみろ」

「——何これ！鉛にメッキされてるだけじゃない」

「投機のために、本物の指輪は妻にだまって売り飛ばしたらしい。裏社会の噂は本当だったな」

「それを確かめるために指輪を盗んだの？」

「この間、ゴルゾと賭をしたのさ」

「でも変ね。普通、偽物なら盗まれたことを黙っていると思うけど……」

「さすが、宇宙船一杯に詰まった脳みそだけのことはある」

「嫌な言い方しないでよ」

「それが——あいつ、今でもアグルダと一緒に寝てたのさ」

「アグルダ？」

「奴の妻だ。それで、俺としたことが指輪を引き抜いた時に、彼女の胸元に落としてしまった」

「まさか！それで、彼女の胸に手をいれて取り出したんじゃないでしょうね」

「アグルダに指輪を盗まれたことを知られた奴は、必死になって指輪を取り戻そうとしているんだ。なにしろ奴の今の地位は、妻の兄であるUGP長官のおかげだからな」

「でも、この騒動で、アルバ族の件は、うやむやになる。あなたそこまで考えて……」

「考え過ぎだ。なんせ今や俺たちの命は風前の灯火なんだぜ。奴は、俺たちを捕まえるつもりはないからな」

「ああ、なまじ捕まえて、指輪が偽物だと公表されるとまずいから。だから、これほど嚴重な警戒態勢をとっているのね。納得はできただ、これからどうするのよ！」

「そうキンキンした声を出すなよ。それより、何か飲み物をくれ」

「紅酒以外なら」

リュウ・バセラは、少しだけブレスレットを睨みつけると、ため息をついた。

「ヴェポア珈琲だ。エスプレッソでくれ」

「C珈琲（カプセル・コーヒー）じゃだめなの。そんな旧時代の作り方じゃなくて」

「だめだ。嫌なら紅酒だ」

「分かったわよ。あれはあとの掃除が大変だから嫌なんだけど……」

宇宙船がいてくれた珈琲を飲みながら、銀河盗賊は、窓一杯に広がるブラックホールを眺めていた。

ミーナは船内カメラでその横顔を捉える。

美の黄金律からは少し外れているものの、生体コンピュータである彼女には、彼の持つ独特の美しさが理解できた。

もし、今後、彼女にもう少し人間的な感性が備わるならば、おそろくこう描写したことだろう。

リュウ・バセラには、どことは知れず高貴な風格が備わっている。例えて言えば、戦いに独り赴く王に似た、孤独の中に、大らかさと毅然とした厳しさを併せ持つ矛盾の神器、激しく飛び交う銃弾の中を、無人の野を行くが如く、悠然と歩く神話の英雄のようだと。

読唇術を心得ない彼女には、その横顔から彼が何を考えているかはわからない。

「ミーナ」

突然、リュウが声をかけた。

いつ果てるともない、内部思考演算に入っていたミーナが、コンマ数秒遅れで返事をする。

「なに？」

「マイロ星系のアバド星は分かるな」

「もちろん」

「そこに行く。警戒網を避けて、ルートを設定してくれ」

「まだ警戒は厳しいわよ」

「いい加減にしろ。お前にとって、この程度の警戒をすり抜けるのは簡単だ。行く先が決まっていなかったから、ここで蹲ってただけだろう」

「それはそうだけど……あんな辺境に何があるの？」

「何もない——だから身を隠すにはもってこいだろう？」

三日後、ミーナは、宇宙船をアバド星の北緯四十度付近の大陸に向けて降下させていた。

「データベースにも、ほとんど何も載っていないけど、実際に見てもほんと、何にもない星ね」

「かつては、重力制御用のレア・メタルが産出されて栄えたが、この二百年は寂れる一方だ。町と呼べるのは、今、降下する場所から二百キロ離れたオウセ・シティだけだな」

「どうしてオウセ・シテイに降りないの？UGPの追っ手もこんな所にまでは来てないのに」

「知り合いがいる……いや、いた」

赤茶けてひび割れた大地の上に、ふわりとミーナは着地した。

激しい戦闘にならない限り、リュウ・バセラが自ら操縦桿を手にすることはできない。

それが、生体コンピュータ、ミーナクシに対して、リュウが示す最大の信頼と賛辞であることが、近頃、ミーナにも分かり始めている。百メートルほど向こうに崖があり、その手前に石で造られた家が建っていた。

宇宙船から伸びたタラップは、リュウ・バセラが地面に降りると自動的に収納された。

「変ね。あなたがいった通り、わたしたちのデータを、あの家の人に送信しておいたのに。なぜ出迎えてくれないのかしら」

久しぶりにリュウの左手に納まったミーナクシが呟く。
船室キャビンに置いていくといつて聞かなかったリュウに、頼み込んでなんとか連れてきてもらったのだ。

筋肉質のリュウの浅黒い腕には、古代イウレカ調の彫刻が施された金色のブレスレット分は、絶対似合うと彼女は思っている。

ミーナの言葉を無視して、リュウは石造りの家に向かって歩き出した。

赤茶けた砂岩の上、赤い石で造られた家にあつて、緑色の玄関扉が妙に印象的だった。

近づくとき、かつては濃い緑色であつたろう木造の扉は、今は色も褪あせて傷だらけなのがわかる。

扉をノックしようとした、その時、屋根から灰色の何かが降ってくるのと同時に、玄関前の地面からも、砂を吹き上げて何かが飛び出した。

一瞬の出来事だった。

リュウ・バセラは、真横に飛ぶと、着地すると同時に向きを変えて、さらに後方に飛んだ。

その数センチ後を、屋根から落ちてきた何か撃つ銃弾が追いかける。

リュウは、回転しながらパルス・ブラストを引き抜き、地面から飛び出して砂煙に紛れながら銃弾を撃つモノに向けて速射する。

砂煙の中で爆炎をあげ、そいつは沈黙した。

さらにリュウは、玄関の雨よけ屋根の柱を片手でつかみ、横向きに一回転すると、素晴らしい早さで扉の前に戻ってきた。

着地と同時にパルス・ブラストを屋根からぶら下がっているモノに向けて静止した。

リュウの顔のすぐ前にも銃口があった。

灰色の塊の一部が開き、白い歯が見えると大きな声が、荒野に木霊こだました。

「さすがだな、ビリィ・ボウイ。腕は鈍っちゃいねえや」

そのまま、顔を中心にくるりと回って着地すると、大きな男が玄関前の岩の上に立っていた。

お互い、銃口は向けたままだ。

「驚いたか？」

「いや、あんたの歓迎の仕方ならわかっているさ」

ニヤリ、と男は笑うと、銃をホルスターにしまった。

リュウが、瞬きする間に銃をしまうのを横目に顎をしゃくりながらいう。

「まあ、中に入れよ。あいつもいるから」

ドカン、と大きな音をたてて、重そうな緑の扉は開いた。

よく見ると、扉には、銃弾の跡らしき傷跡も無数にある。

手で示されるまま、リュウが広い室内の真ん中にあるテーブルに座ると、ミーナが早口でまくしたてた。

「今のあの動きを分析すると、どちらも本気で相手を撃とうとしていたわ。どういうこと？」

銅製のマグカップに、得体の知れない、不気味な煙の立つ飲み物をいれて近づいた男が目を丸くする。

「なんだ、そいつは？女みたいじゃないか」

「みたいじゃなくて、女。というより女神なの。古代地球の神話の、魚の目をした女神」

「もしかして、それはAI人工知能かい」

部屋の隅から別な声が出て、ミーナは宝石を模したカメラをそちらに向けた。

背の高い痩せた男がこちらを向いていた。

「さっきのは、どうしてもミツブがやろうっていうから。俺はとめたんだけど」

「かまわないさ、ナーブ。あんたのおかげで、俺はマシンの奇襲に強くなった。昔の弾のあとが、ふくらはぎに残っているがね」

「さすがに、あの時はマリアに怒られたね」

「おい、その名を口にするな」

灰色の服を着た大男、ミツブというらしい、が大声で睨みつけると、ナーブと呼ばれた男は震え上がったようだった。

「ご、ごめんよ。悪かったよ」

ミツブは、今度はリュウを睨みつける。

「で、ビリー・ボーイ。今頃何しにやって来た」

「返事次第では、お前を生かしては帰さない」

「分かっているだろう」

「分からないね」

「俺は、マリアに逢いに来た」

ドン、という大きな音が出て、巨大なテーブルがひっくり返った。

「その名を口にするな。特にお前は」

「あんたが怒るのは分かる。だが、俺は、彼女との約束を果たさなければならぬんだ。そのために来た」

「何十年も放りっぱなしで、今さら何の約束だっていうんだ」

ミツブは悪鬼さながらの形相だった。

レンズを通して見るミーナでさえ、居心地の悪さを感じたほどだ。

「ミツブ」

ナーブが声を掛けた。

かたり、ことり、と音を鳴らしながら歩いてくる。

ミーナの解析によると、ナーブというこの男の足は、両方とも機械仕掛けだった。

右足は足首から、左足は膝から下が。しかも、恐ろしく旧式だ。こんな辺境では仕方がないのかもしれないが。

中央では、クローン技術の応用で、いくらでも生身の体が入るというのに。

「ビリーの話聞いてやったらどうだ」

「聞く必要なぞないさ。こんな恩知らず」

「でも」

「黙れ！さもないと」

大男は、ナーブに指を突きつけた。

「ミツブ」

「うるさい！黙れ！」

「黙らないよ。マリアとの」

ミツブの顔が怒りに赤黒く変わった。

ナーブに突きつけた指が小刻みに震えている。

しかし、今度はナーブも震え上がらなかった。胸を反らしてきっぱりという。

「彼は、マリアとの約束だといっている。だったら、俺たちは聞いてやらないと」

「ナーブ。お前……」

ミツブの目から、怒りの色が急速に退（ひ）いていった。

「わかった。言ってみろ」

そういつて、大男は、さつきの騒ぎで奇跡的に倒れていなかった大きな椅子に、どざりと座り込んだ。

「俺は、地球を見つけた」

「何だと？」

ミツブは立ち上がりそうになるのを必死に抑えていた。

ナーブも驚きに目を見開いている。

「しばらく前のことだが。そして実際に行ってきた」

「あつたのか、本当に。地球が」

「そうだ。だから、俺はマリアに会わなければならない」

大男は、うつむき、しばらく黙り込んだ。

やがて、顔を上げ、いった。

「では、会って来い」

「彼女は洞窟か？」

「そうだ」

「分かった」

リュウは、椅子から立ち上がると、倒れたテーブルに近づき、片手でそれを起こした。

一見、簡単そうに見えるが、凄まじい力が必要な行為だ。

「こいつは、ここに置いておく」

そういって、ミーナを外そうとする。

ミーナは考える限りの言葉を使って抵抗を試みたが、結局は腕から外され、テーブルの上に置かれたのだった。

そのままリュウは家を出て行った。

部屋に残された二人の男と一人の女？は、しばらく何もいわずに黙っていた。

最初に口を開いたのはナーブだった。

「君は、AIだよね」

そういいながらテーブルに近づき、椅子に腰掛ける。

「失礼ね。AIなんて、誰かが作ったプログラムと同じにしないで。わたしは、生体細胞を核に使ったバイオ・ニューロン・サーキットの知性体なの。自己増殖して、自分で自分を進化させる生命体よ。お仕着せのプログラム知能とは違うわ。だいたい、わたしは、あなたたちよりずっと年上なんだから、そのつもりで敬意を払ってね」

「ご、ごめんなさい。ママ」

「だからといって、オバさん扱いもやめて。ママなんてごめんだわ」
突然、爆発音のような音がした。

やがて、ミーナは、それがミップの笑い声だということを知った。

「なかなか、こいつは、いいネエちゃんだぜ。なあ、ナーブ」

「そ、そうだね。なんだか、マリアに似てる」

「確かに……似てるな」

なぜかタブーとされている『マリア』という言葉だが、ミーナはこれを機会に思い切って尋ねてみた。

「もし、よかったら、マリアさんについて、教えてくれない」

「マリアについては話したくない」

「じゃあ、リュウとあなたたちの関係について」

「それを話すとマリアの話をしなくちゃならない。だめだ」

「頑固ねえ……：そういうえば、あなたたち、リュウのことをビリイと呼んでたわね」

「あいつは、昔、ビリイ・アルトと呼ばれてたんだ」

「マリアさんが名付けたの？ひよつとして、マリアさんて、彼のお母さん？」

「——あんた、あいつから何も聞いてないのか？」

「ええ」

「その通りだ。マリアがあいつをビリイと名付けた。だが、マリアはあいつの母親じゃねえ」

ミーナは、ミツブの顔に苦悩がよぎるのを見た。

「さっきの会話からすると、子供の頃の彼を鍛えたのは、あなたたちなのね」

ミーナは話題を変えることにした。

「そうだ」

「覚えは良かった？」

「覚えが良かった、なんてもんじゃない。奴には才能があった」

「それは控えめ過ぎるね。ビリイは戦闘の天才だった。天才という言葉が逃げ出すほどのね」

ナーブが口をはさむ。

ミツブは遠い目をした。

「確かにあいつはすごかったよ。俺はよくこいつと話したもんだ。やつぱり、血は争えないってね」

「ミツブ！」

「ん？ああ、わかってるよ、ナーブ。だが、このお嬢さんは、本当にマリアに似てる」

「ミーナって呼んで」

「よし、わかった。ミーナ、話してやろう。もう随分まえの話だがな——」

ロス・サントス・マリアは盗賊だった。父親もその父親もそうだったから、まあ家業みたいなものだな。

盗賊といっても、貧乏人から盗むんじゃない。汚いことをして私服を肥やす政府の人間や企業の重役から金目のものを奪う、いわゆる義賊というやつだな。もつとも、マリアはそう呼ばれるのを嫌がっていたが。

どんなに美化しても、所詮はドロボウに過ぎないのだ、と。

その辺の考え方もハンサムだった。

そう、マリアはハンサムな女だったんだ。

金髪に緑色の目、大きな体。

まるで、ヨモスの美の女神の化身だったな。

え、俺？俺か？

俺は、もともと、ある星の軍人だったんだ。

秘密潜入任務や荒仕事のどちらもこなして何度も表彰されたな。英雄とも呼ばれた。

だが、ずっと、いつも空しかった。

俺には戦う理由がなかったからだ。

職業として軍人を選び、それに適性があった、ただそれだけだ。

だが、マリアと出会って俺は変わった。

戦う目的が出来たんだ。

マリアを守り、彼女のやることを手伝う。

彼女の欲びが俺の欲びだった。

こいつだってそうだ。ナーブは、もともとGCG（銀河中央政府）
直属の研究機関で、将来を嘱望された研究者だった。専門はロボロボティクスト
工学だったな。

だが、やはり空しかった。

研究は楽しい、だが、その先の、研究する理由を奴は持ち合わせていなかった。

だが、マリアと出会って、こいつにも生きて、研究する理由ができたんだ。

こいつ自身は盗みに入ることはできないが、こいつの作ったマシンがマリアを助けてよく働いた。

俺たちは良いトリオだった。

まさに理想的。

愚かだったよ。

俺もこいつも、このすばらしい生活が、ずっと続くと思いきんでいた。

しかし、黄金時代（ゴールデン・エイジ）は、たちまち過ぎ去ってしまった。

それからしばらくして、マリアは不幸な出会いを続けて二度することになる。

どんなに優秀な盗賊でも失敗はする。

問題は、その時のプランB（代替案）をどれだけ多く作っておけるか、だ。

だが、いつも用意周到の盗みができるわけじゃない。

状況によっては、やむなく見切り発車することもある。

ある星の軍部が、恐ろしい生物兵器を開発したと聞いて俺たちはそれを盗みに入った。

大したものではないけれど、それを敵対する星に売り、本当に残酷な兵器なら歴史から末梢するためだった。

急に入った情報のため、準備には三日しかかけられなかった。

ロクなプランBもないまま、仕事にかかったわけだ。

案の定、マリアは軍につかまった。

そのの將軍というやつが、サディスティックな奴で、捕まれば、どんなひどい拷問をされるかわからないという噂だった。

俺たちは、情報を集め、なんとかマリアを助けだそうとした。

しかし失敗した。

万策尽きて、ほとんどマリアのことは諦めた時「あの男」が現れたんだ。

第一回終わり。

了